

主 題：ピレモンへの手紙から学ぶ ―パウロの愛と配慮―
聖書箇所：ピレモンへの手紙 8-21節

きょうは皆さんと一緒にピレモンへの手紙から学んでみたいと思っています。このピレモンへの手紙は25節しかない短い短い手紙です。この手紙はパウロによって書かれたと1節に記されています。そして宛先はピレモンです。この手紙の内容は、ピレモンの奴隷であったオネシモに関しての手紙です。またこの手紙もローマの獄中で書かれました。ですから、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙と同じように「獄中書簡」と呼ばれています。その中でもコロサイ人への手紙と非常に関係の深い手紙です。この手紙の核心部分は17節から21節にかけてです。そしてこの手紙の登場人物は3人で、パウロとピレモン、そしてオネシモという奴隷です。

まず1節を見ていただきますと、「キリスト・イエスの囚人であるパウロ」と書かれています。パウロが自分のことを「囚人」ということばを用いて紹介しているのはここだけです。この囚人ということばは「縛る」という動詞から派生したことばです。パウロが獄中にある自分の苦しみは恵みであると捉え、自分は福音宣教に縛られたことをイエス・キリストに感謝し、またそのことを誇りとしているということを、この囚人ということばから私たちは読み取ることができます。イエス様がパウロに対して、その召命の時に言われたことが使徒の働き9:15-16に記されています。「:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選ぶの器です。:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」」。ご存じのように、パウロは召された後、主の働きに用いられるのですけれども、彼のその歩みは本当に苦難、困難の連続だったということが聖書の中から教えられています。

1. ピレモンについて

そしてもうひとりにはピレモンです。パウロはこのピレモンについて1節で「私たちの愛する同労者ピレモン」と言っています。ここで「同労者」ということばを使っています。パウロはこのピレモンに対して身分の上下関係があるとか、あるいは主従関係があるとか、そういうことではなくて、主に召された者として同じ立場で、同じ使命のために働く共働者、ともに働く者だということはこの同労者ということばに含めています。

そして、ピレモンはコロサイに住んでいたことが、コロサイ人への手紙に記されているのですが、ピレモンの家は家にある教会として用いていたということを知ることができます。初代教会では、このように自分の家を教会として用いていたことを私たちはいろいろなところから知ることができるのですけれども、ローマ16:3-5、Iコリント16:19にはアクラとプリスカの家にある教会というような記述がありますし、コロサイ4:15には「ヌンパとその家にある教会」と記されています。このようにピレモンの家は当時教会としてみんなが集まる場所であったということです。

① ピレモンは信仰と愛とに富んでいた 5節

また、このピレモンについてパウロは5節で「それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。」と言っています。ピレモンは信仰と愛に富んだ人物であったということがわかります。

② ピレモンの働き 7節他

また7節にはこう記されています。「私はあなたの愛から多くの喜びと慰めを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによってカづけられたからです。」、ピレモンは多くの働きをしていました。そしてその中で、聖徒たちをいろいろな意味で励ます、そういう働きを彼がしていたということ、こ

の7節から知ることができます。具体的にどういう働きをしていたのかは、レジメに書き記しておきましたので、またぜひ後で確認をしていただきたいと思います。

2. オネシモ「役に立つ者」の意

そしてもうひとり、ピレモンの奴隷であるオネシモが登場人物です。このオネシモという名前ですが、これは「役に立つ」という意味です。10節の欄外の注を見ていただきますと、「直訳「有益な」」と記されています。先ほども言いましたが、彼はピレモンの奴隷でしたが、罪を犯してピレモンのもとを離れた、逃亡したのです。そしてローマでパウロと会って、パウロによって回心の道を歩むことになったのです。10節に「獄中で生んだわが子オネシモ」と書かれています。だからこのオネシモの救いにはパウロの働きがあったということがよくわかります。この10節は日本語では「獄中で生んだわが子オネシモ」と書かれていますけれども、ギリシャ語では「私は獄中で彼の父となった」という書き方がなされています。パウロはオネシモは私の産んだ子どもなのだとすることを明らかにしています。

彼は本当に忠実なクリスチャンとして成長しました。パウロはそのオネシモのことを12節で、「彼は私の心そのものです。」と言っています。しかし、彼はピレモンの奴隷で、罪を犯して逃亡した。そして彼は主人のもとに戻らなければいけない、そういう奴隷です。ですからパウロはこのオネシモを主人であるピレモンのもとへ送り返そうとするのです。ピレモンのもとへオネシモを送り返すために、パウロがさまざまな働きをするということがこのピレモンへの手紙に記されています。

3. パウロの愛 15-19節

私たちはきょう、パウロが彼のもとにいるオネシモをピレモンのもとに戻すことにおいて、パウロの愛、またパウロの配慮というものを学んでいきたいと思います。

獄中で生んだわが子オネシモを通してのパウロの愛はどのような愛であったのか、そのことが15-19節に記されています。お読みしますと、「:15 彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。:16 もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあっても、そうではありませんか。:17 ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。:18 もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのであれば、その請求は私にしてください。:19 この手紙は私パウロの自筆です。私がそれを支払います——あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが、そのことについては何も言いません。——」。

① 15節

15節は日本語の文章では「たぶん」ということばが文中に置かれています。ギリシャ語の原文ではこの「たぶん」ということばが文頭に来て、強調されています。この日本語でたぶんと訳されたことばは「間違いなく」という意味を持ったことばです。だから「間違いなく、彼がしばらくの間あなたから離されたのは、あなたが彼を永久に取り戻すためだったので」となります。この「離された」ということばは受け身になっています。だからだれかが彼らを離したということです。私たちはオネシモがピレモンのもとから逃亡したことは神の計画の中にあつたことだということを、受け身を用いていることから知ることができます。

そして、「しばらくの間」と「永久に」という二つのことばが使われています。「しばらくの間あなたから離されたのは」、「あなたが彼を永久に取り戻すためであった」と。この二人を離した神様の計画、みこころは、一時的な損失、一時的に失ったことを永久的に獲得する、永久的に得るものへと変えるものであつたということです。それをここでパウロは「しばらくの間」ということばと「永久に」ということばを使って私たちに教えています。

私たちが自分たちのことを考えてみますと、私たちの周りにもしばらくの間離されている者がいるかもしれません。それは家族であったり、友人であったり、知人であったり。私たちはそういう人たちを今、離されている者、自分から離れている者と認識しているかもしれません。そういう時、ああ、離れていった、もう会えないと私たちはよく失望します。でも、私たちは神がどういう方であるかをもう一度知る必要があります。パウロはローマ8：28で「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」と言います。たとえ私たちの周りに離されている者がいたとしても、私たちは主がどういうお方であるのかをもう一度覚える必要があります。主は私たちに主の最善をなしてくださる方です。このピレモンとオネシモの関係もそうです。確かに、離れることになったのですが、しかしそれは永久に結ばれるための一つの神様のご計画であったということです。このオネシモとピレモンの関係から、私たちの周りのこともすごく教えられるということです。

② 16節

そして16節に入りますと、「もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。」とあります。15節で「取り戻す」ということばが使われていますが、この取り戻す内容を16節で教えています。ピレモンとオネシモは、以前は主人と奴隷という関係でした。しかし今は、ピレモンとオネシモは愛する兄弟として強いきずなで結ばれるようになったとパウロは言うのです。「私にとってそうです」、パウロにとってはそうですと言うのです。10節でパウロは、オネシモは私が獄中で生んだ子どもだと言っています。また19節では、恐らくピレモンもパウロの導きによって救われたことをうかがい知ることばが記されています。だからパウロにとっては、このピレモンとオネシモの二人は愛する自分の子であり、また愛する兄弟でもあったのですから、その二人が愛する者になるということは、パウロにとっては大きな大きな喜びであったに違いありません。

そして「あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあっては」と続きます。パウロはピレモンに対して言うのです。確かに以前は主人と奴隷、そういう関係であったけれども、今は違う。今は愛する兄弟として深い深いつながりができたのだから、オネシモを喜んで迎えてほしいと。確かに肉的には、人間的には家族の一員として、そして主にあっては、霊的な意味では愛する兄弟として、今あなたはオネシモを得たのだ、オネシモを取り戻すことが可能になったのだと、パウロはピレモンに言うのです。

③ 17節（17－19節がこの手紙の中心）

そして17－19節がこの手紙の核心部分です。パウロはこう言います。「:17 ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。:18 もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのなら、その請求は私にしてください。:19 この手紙は私パウロの自筆です。私がそれを支払います」と記されています。「ですから」というのは前の節を受けてのことです。オネシモが以前は奴隷であったけれども、今は愛する兄弟となったことを受けて、パウロはピレモンに言うのです。私とあなたは確かに同労者ではあるけれども、あなたが私を親しい友と思ってくれているなら、どうかオネシモをも親しい友として迎えてやってください。

このことをカルヴァンはこのように注解しています。「もし人が、神がその子どもたち（クリスチャンのことです）の集まりに加えてくださった兄弟を仲間として恥じるなら、それは高ぶりのしるしである」と。もし私たちが神がクリスチャンの集まりに加えてくださった兄弟を仲間として恥じるなら、それはその人の高ぶりのしるしだとカルヴァンはここを注解しています。パウロはピレモンに願うのです、オネシモをも親しい友として迎えてやってくださいと。

④ 18－19節

そして、パウロは18-19節で、もしオネシモがピレモン、あなたに負債を負っているなら、その負債を私が全部支払いますと言うのです。このパウロの行動です。

a. イエス・キリストの十字架

パウロの態度は、私たちにある方の行為を思い起こさせます。それはイエス・キリストの十字架上での行いです。オネシモの負債を支払うというこの行動は、パウロがイエス・キリストの愛の実際的な行為として行おうとしていることを私たちはこの文章から理解することができます。イエス・キリストの十字架、それは私たちの負債をイエス様がすべて負ってくださり、そしてその負債を清算してくださった。イザヤ53：4-6をお開けください。お読みします。「:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かたがたの道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」、このようにイエス・キリストのことが預言されているのですけれども、イエス様は十字架上でこのようなことばを言われました。ルカ23：34に「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」、自分を十字架にかけた者たちに対して、イエス様は彼らを赦してくださいと天のお父様に願っています。

☆愛の本質

そしてパウロは、このイエス様の十字架がどういうものであったのか、Iコリント15：3-4でこう言うのです。「:3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、:4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」、イエス様が十字架にかかって葬られ、しかし三日目によみがえったことは、私があなた方に伝えたこと、いや私が聞いてそれをあなた方に伝えた最も大切なことだとパウロはここで言うのです。ローマ3：24でパウロは「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」と語っています。この十字架を誇ったのはパウロだけではありません、ペテロも同じです。Iペテロ2：24でこう言います。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と。イエス・キリストの十字架は私たちの罪を負ってかかれたのだと。ヘブルの記者もヘブル9：28で「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、」と言います。イエス・キリストは私たちの罪を負って十字架にかかれたのだと言っているのです。パウロのこのピレモンに対することば、オネシモに負債があるなら私がオネシモの負債を全部あなたに支払いますということばは、まさに私たちの罪をあゝの十字架で清算されたイエス様の行為を、パウロがピレモンに対してなそうとしていることを私たちはここから知ることができます。

b. 19節

そして19節に「この手紙は私パウロの自筆です。私がそれを支払います」と書かれています。私たちがもしだれかからお金を借りる時には借用証書を書きます。そして、債務者である自分はそのに自筆で署名をして、日本ならば押印します。パウロがここで言っているこのことばは、まさにそのことを表しています。債務を負っているパウロが署名します、それでこの手紙は私の自筆ですとパウロは言うのです。オネシモを通してのパウロの愛は、すべての負債を私が負いますというピレモンに対する宣言でした。それはまさにイエス様のあゝの十字架と同じように大きな大きな犠牲を伴った愛だったのです。

4. パウロの配慮 (8-10、14、20、21)

また、パウロは同労者であるこのピレモンに対して配慮をもって望んでいます。そしてその配慮の動機は愛に根差したものです。そのことが、このピレモンへの手紙 8-10 節、そして 14 節、20-21 節でパウロの配慮を知ることができます。

① 8-10 節

a. パウロは初代教会の第一人者

8-10 節「:8 私は、あなたのなすべきことを、キリストにあって少しもはばからず命じることができるのですが、こういうわけですから、:9 むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思います。年老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、:10 獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。」。この当時のパウロは偉大な使徒です。確かに今獄中にある。でもその獄中にあるのは、イエス・キリストの働きのためでした。そしてだれもがこのとおり、パウロが偉大な使徒であることを認めていました。ピレモンもこのパウロによって救いへと導かれた者です。だからパウロはピレモンに命令することができたのですけれども、パウロはそうはしなかったということです。

b. ピレモンに対する配慮

パウロはピレモンに配慮をもって望んだことがここから知ることができます。パウロは上から命令するのではなくて、ピレモンの心、また思いに配慮してオネシモをぜひ奴隷としてではなくて、主にある兄弟として受け入れてくださいとお願いをするのです。

9 節を見ますと、「あなたにお願いしたいと思います」、10 節では「あなたにお願いしたいのです」、こう懇願のことばがつづられています。パウロのこのピレモンに対する配慮は、私たちも、特に霊的リーダーと言われる人たちは、ここから学ぶ必要があります。上から目線で信徒の皆さんを見るのではなくて、信徒ひとりひとりの心、また思いをよく理解し、そして彼らの霊的成長を願ってひとりひとりにふさわしい導きを与えることが大切だということを私たちは学ぶ必要があります。

② 14 節

このパウロの配慮は 14 節に「あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。」と記しています。

a. オネシモの所有権は主人であるピレモンにある

何度も言っていますが、オネシモはピレモンの奴隷でした。奴隷の扱いは、主人の所有物ですから、主人の意思のままです。ですから奴隷は主人の同意なしには何をすることもできなかつたし、周りの人たちも当然です。ですからパウロは「あなたの同意なしには何一つすまいと思いました」と言うのです。オネシモの所有権を持っているのはピレモン、あなただから私はあなたに同意を求めて、このオネシモのことを対処したいと、パウロは言っているのです。

b. 「喜んで～する」という信仰の自発性、自主性によって愛の実践によってオネシモを受け入れてほしい

そしてなおかつピレモンに対しては、「あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです」と言います。それは「喜んで～をする」、そういう信仰の自発性あるいは実践をパウロはピレモンに求めたのです。パウロはピレモンに対して「ピレモン、あなたが持っているあなたの良いものをあなたが自発的に私に見せてください」、このように言うのです。またそれは違うことばで言うならば、パウロはピレモンに愛の実践を促しているのと取れるかもしれませんが。なぜなら先ほども言いましたが、このピレモンという人物は愛に富んだ人であったとパウロは 5 節に記しているからです。

ピレモンに愛の実践を促す、そしてこの愛の実践がどのようなものであったのか、私たちは I ヨハネ 3:16-18 を読む時に教えられます。そこには「:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。:17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、

どうして神の愛がとどまっているでしょう。:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」と記されています。これがヨハネが教える愛の姿です。パウロも同じように、ピレモンに対してこのような愛の実践を促しているのです。それは犠牲の伴った、そしてあわれみの心を持った、相手を思いやる心を持って、言うだけではなくて行いと真実を持って、正しい動機を持った愛の行いをパウロはピレモンに望んでいるのです。

③ 20、21節

20-21節「:20 そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあって、元気づけてください。:21 私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをしてくださるあなたであると、知っているからです。」とあります。パウロは愛の人であるこのピレモンに対して、さらに期待して懇願するのです。20節「私の心をキリストにあって、元気づけてください」、この「元気づけてください」ということばですが、7節で「カづけ」と日本語に訳されているのと同じことばです。7節でパウロはピレモンの愛から喜びと慰めを受けた、そしてこの20節ではピレモンがオネシモを主にある兄弟として心から迎えてくれること、それは獄中にあるパウロの心にまた喜びと励ましを与えるものなものと、パウロはピレモンに言うのです。

そして21節「私はあなたの従順を確信して」と言います。もちろん最も大切な従順という行為は神に対するものです。しかし、ここでピレモンが主に従うようにオネシモに関しても、このパウロの申し出を心から受け入れてくれること、そういう従順さを持って対応してくれることを確信していますとパウロは言うのです。

5. 考えてみましょう

このピレモンへの手紙は25節の短い短い手紙です。しかし、ここにあふれているパウロの思いは愛であり、周りの人たちに対する配慮です。私たちはきょうこの短い手紙から、パウロの愛とその配慮を学びました。大切なのは、この学びから私たちが何を自分のものとするかです。聞くだけの者であってはならないとみことばが教えていますように、私たちはここからしっかりと学び、しっかりと日常生活に取り入れていく必要があります。

皆さんの愛の実践、またその配慮はどのようなものですか？神に対して、皆さんの働きは皆さんの喜びとなっていますか？また、周りの人たちに対して、その人たちのために労することが皆さんの喜びとなっていますか？もしかしたら、煩わしいと思いませんか？周りの人たちに十分に配慮したことば、また態度をとっていますか？独善的になっていませんか？自分のことだけを考えたことばや行いになっていませんか？

私たちはきょう学んだこのピレモンへの手紙から、もう一度ひとりひとり、自分の信仰を吟味してみましょう。そして私たちがますます主に喜ばれるクリスチャンとして、神のために労する、神のために働く。また兄弟姉妹のために、周りの人たちのために労する。それが大きな大きな喜びとなることをきょう私たちは学びましょう。